油絵研究領域版画
王豫敏

「版」をめぐる行為 —— スズカケノキの痕跡をたどる

本論文は、私が版画に初めて触れた頃から、版画技法研究や制作、プロジェクトによる実践的な行為を通じ、それまでのオーソドックスな版画から版における開放的な表現の可能性へと変容していった軌跡をたどる制作論である。私は「版」そのものに関する形や様式、物質性の面、および間接的転写という必然的な展開性と、私個人の経歴の接点を結んで考えている。

本文は主に「旅人の本」、「痕跡の林」、「スズカケノキ」の３つの制作プロジェクトで考察を試みる。「旅人の本」は、私が中国伝統木版画技術（餔版・トウハン）をもとにして、日本の技法と素材を取り入れ制作した版画集である。日本での生活にまだ不慣れだった私は、日本独特の「ハンコ文化」に基づく行政方法に戸惑い、その時受けたカルチャーショックがモチベーションとなり、修士課程の修了制作「痕跡の林」を制作した。「スズカケノキ」は、私自身の個人的な記憶に向かっての再読である。それら三つの制作のテーマ、方向性は、異なる要因や動機に引かれて触発されたことを述べる。

一般的には版のイメージは何か表現しようとする内容を版にして転写してゆくもというものである。このような刷り残すことを目的とした転写には、版がいつも隠されている。私はここでは、「版」というものを印刷工程の一環として転写のための物体/支持体として位置づけられた概念から解放して考えたい。例えば、「痕跡の林」は、版の扱いを、彫る造形行為と、版を刷るという行為とを並置させて見るインスタレーションである。今回の提出作品のインスタレーションの空間では、版自体を成立させようとした切削の造形行為と、版で転写する間接の描写と連動する表現を試みた。

印刷工程の流れに固定された版の位置付けや序列を揺らがさようとした一方、私は時に「版」そのものの形や様式、物質性を再考してみる。一般的な版は平らな状態のことを意味しているとするならば、私の研究では、丸い木の実、出窓やベンチは版「木（材木）」に扱うといった切削する行為（彫る、刻む、削る）を彫刻空間へ延長していく「版」なのである。

版や転写材、刃物という補充工具の介入は不自由な表現手法であるが、その場その場で素材や技術の融通性/柔軟性によって、「版」を扱う身振りや姿が導かれるのではないだろうか。私は3つの制作プロジェクトを制作しながらそれに気づいた。

本論文は以下 3 章で構成する。

第一章「本と版と書」は、私の中国時期の版画体験および、中国の創作版画運動において優位を取った油性の「黒白木版」、水性木版である「水印木版」と、精巧な性格や版の可動性が長所である伝統的な木版画を比較した。また、中国での経験と、私が日本に来たばかりのころに制作した「旅人の本」の着想、装飾的な画風、絵に配する詩、ブック‐デザイン、日本と中国の木版技術の融合の試みと、紙の肌合いや物質性を述べる。最後は書物、印刷について文字と本の印刷様式、転写材による平面・立体の印刷からの考察と感想を述べる。

第二章「印｜彫｜跡」は「痕跡の林」と「スズカケノキ」-「カレンダー」をめぐって考察する。

「痕跡の林」では私が日中双方でハンコに持つ先入観、徐々にデジタルに移行するハンコの現状、デジタル符号の特性について考察する。その後、木の印材に行った二進法式を彫ることと、林立するように立たせたインスタレーションイメージの仕組みや制作過程を説明する。そして、アイデンティティやデジタル化のテーゼに寄せて形骸化されたハンコのイメージを述べる。

「スズカケノキ」では私が日本でスズカケノキと再会した際の心境変化、浮かび上がる幼少期の記憶や都市化による人々に与えする影響を語っている。そして、私はその記憶の片隅に想起した断片的かつ映像のような思い出を述べ、それに関連して、初期段階で作った版画集「カレンダー」をここで紹介する。

第三章は「記憶の痕跡-提出作品：スズカケノキ、とある部屋に」をめぐる考察をする。

①インスタレーションの空間で目を引く部分は「出窓」であり、出窓・ベンチのパーツをたくみに活用することによるねじれた空間について考察する。 ②もうひとつは「部屋」からの展開で、部屋感を感じられる分散して置かれた作品は、カレンダーからの文脈があり、カレンダー冊子とその延長線上（冊子の内にたたむ空間と冊子から外へ広く空間）で連動していることを述べる。

造形行為に関する面には、「刻印」という記憶の言い回しを「刻」、「印」への分解法、絵画と彫刻の交差/補足および、オーソドックスな版画から開放的な版表現への可能性は、①②のパートに織り込む形で述べている。

最後に、インスタレーション空間における家（ホーム）のメタファーについて説明する。